

広島における平和教育の特徴と課題

—教職員組合が作成する平和教育教材資料を中心にして—

小川 英夫

(2021年10月5日受理)

Education for peace in Hiroshima: Particularities and difficulties
— an analysis of materials for peace education created by the teachers' union —

Hideo Ogawa

Abstract: Hiroshima city was attacked by an atomic bomb during World War Two. Many children, students and teachers died or were exposed to radioactive rays. After the war, all the teachers in Hiroshima expected world peace, so they started *education for perpetual peace*. However, the numbers of teachers who undertook peace education were small. A lot of people affected by the atomic bomb—“Hibakusha,” including teachers, thought that it would be better to erase the memory of the A-bomb experience. In this situation, Osada Arata who was a Hiroshima University professor and also “Hibakusha,” published notes about child victims of the A-bomb, titled “Children of the Atomic Bomb.” In this book, Osada argued for peace education. He asserted that children’s A-bomb experience was the foundation for perpetual world peace. This argument prevailed in Hiroshima peace education for a long time. However, this thought is too ideological to fully capture the reality of human beings. It underestimates the people’s *Pathos*, by which I mean the reality of people’s lives. This fundamental contradiction has continued and complicated Hiroshima peace education. This essay describes the contradictory situation of Hiroshima peace education between 1945-2000.

Key words: Hiroshima, peace education, atomic bomb, Osada Arata, Pathos

キーワード：広島，平和教育，原子爆弾，長田新，パトス

はじめに

1945年8月6日8時15分、広島市中心部上空で炸裂した原子爆弾は地上に未曾有の光景をもたらした。それは人の知りうる限りの言葉では、「地獄」と表現するしかないものであった。あまりに異常な体験であったため被爆体験にどう対応すべきか、広島の人々の思いは様ではなかった。複雑な思いは教育に携わる者の間でも同じであり、「終戦」をはさんで原爆投下から間もない9月に始まった戦後の教育への対応にも教員間に意識の差があった。

自らの原爆体験を語ることによってその悲惨を反戦平和につなげたいと思う教員と、思い出すことすら避けたい、語りたくない、語れない、語りつくすことはできないと思う教員との差が学校現場にはあった。

戦後の教育改革がGHQの主導によって矢継ぎ早に行われたが、被爆地広島では原爆に対する意識の差を抱えたまま出発することになった。GHQは労働組合の結成も奨励し、広島県内にも教職員組合（広島県教職員組合、以下広教組）が作られ、1980年代まで高い組織率を維持した。

広教組が進める平和教育は被爆体験を起点にして反

核・平和に向かう子供を育成することを目標とするもので、高い組織率を背景に学校における平和教育の実践に強く影響し、更に広島県・市の教育行政とも連携しながら県内に平和教育理念の定着を進めていくことを目指した。また、広教組の進める平和教育は教職員組合の全国組織である日本教職員組合（以下、日教組）を通じて県外にも伝わっていき全国の平和教育にも影響をおよぼしていった。

一方で教員の書いた手記の中には、学校内で平和教育を進める教員に向けて管理職を含む他の教員が反米的、イデオロギー教育などと非難する事例の報告が散見される。また、平和教育に対する意識の差は4節に示した広島市内の国民学校が作成した「教育プラン」の動向や、5節で取り上げた被爆者や児童生徒に対するアンケート調査の結果にも現れている。広島の平和教育を考える際にはこの意識の差を見逃すことはできないだろう。

日本の平和教育に関する先行研究には村上登司文や竹内久顕のほか、宮原誠一、五十嵐頭、村井実、森脇健夫、中野重人、二杉孝司らの研究があり、村上が日本の平和教育への批判を整理している。村上によれば批判の中心は日本の平和教育が「心情的」であり善悪の一方的な決めつけの授業展開になっている。また、残虐な教材は科学的に考える前に子供を思考停止に陥らせ、科学的に考えることを困難にしているなどの点にあるという。(村上, 2009)

本稿では日本の代表的な平和教育となった広島の平和教育の発展の経緯を明らかにしつつ、実際の学校における平和教育の受け止め方の差に注目することによって、平和教育批判が指摘する課題に回答していきたいと考えている。このテーマを考えるために広島の平和教育を主導し教材を提供してきた広教組の関わる主要な平和教育資料集とその資料に教材として示されている他の文献資料等を中心に検討する。

本稿では主に以下の資料を用いた。

- ①『未来を語りつけて—原爆体験と教育の原点—』1969年 広島県教職員組合・広島県原爆被爆教師の会編（『69未来』と略記）
- ②『ひろしま—これはわたしたちのさげびです—(試案)』1970年 小学校平和教育教材編集委員会・広島県原爆被爆教師の会編（『さげび』と略記）
- ③『“ひろしま”から学ぶ—高校用原爆・平和教育教材資料（試案）—』1971年 広高教組 原爆・平和教育推進・編集委・原爆被爆教職員の会編（『学ぶ』と略記）
- ④『原爆をどう教えたか 教育問題新書34』1971年 広島県原爆被爆教師の会・広島県教職員組合共編

（『どう』と略記）

- ⑤『続・未来を語りつけて—ヒロシマ・平和教育の継承と連帯 原爆被爆五十年事業』1995年 広島県教職員組合・広島県原爆被爆教職員の会編（『95未来』と略記）
- ⑥『戦中戦後における広島市の国民学校教育』1999年 広島市退職校長会「戦中戦後における広島市の国民学校教育」編集委員会編（『退校会』と略記）上記、6種の資料の中で教材として繰り返し推奨されているもののうち、次に挙げる書籍を検討した。
- ⑦『屍の街』1948年 大田洋子
- ⑧『原爆の子—広島の子』1951年 長田新編（以下、『原爆の子』と略記）
- ⑨『ヒロシマ・ノート』1965年 大江健三郎
- ⑩『この世界の片隅で』1965年 山代巴編
- ⑪『原爆体験記』1965年 広島市原爆体験記刊行会編
- ⑫『黒い雨』1966年 井伏鱒二
- ⑬『原爆・500人の証言』1967年 朝日新聞社編
- ⑭『はだしのゲン』1975年初出、『中公愛蔵版 はだしのゲン』1996年 中沢啓治
- ⑮『いしぶみ —広島二中一年生全滅の記録—』1983年 広島テレビ放送編（『いしぶみ』と略記）

1. 長田新の人間観と平和教育思想及び『原爆の子』手記の特徴

広島の平和教育における差異を考察するために、最初に長田新編『原爆の子』に見られる長田の平和教育思想を検討する。

『原爆の子』はGHQ プレスコードの影響が残る中、1951年に岩波書店から出版された。1948年に書かれた作家大田洋子の『屍の街』はGHQの意向によって直ぐには公刊できず、広島市が募集し1950年に出版予定であった『原爆体験記』も出版差し止めとなった。このような状況下で1951年に出版された『原爆の子』は、被爆6年後、最も早く出版され、その後への影響も大きい。『原爆の子』における長田の「序」文は2段組み40頁の短いものである。そこに記されている長田の考えを次の6つの観点によって整理する。(以下、この節での『原爆の子』からの引用は頁数のみとする。)

- | | | |
|--------|------|--------|
| ①戦争観 | ②子供観 | ③教師観 |
| ④平和教育観 | ⑤憲法観 | ⑥原爆投下観 |

まず、「戦争観」であるが、長田は戦争を一部の政治家が自分の利益のために引き起こすものだとし、国民は戦争に巻き込まれる犠牲者であると規定する。その考えは例えば次のような言葉に表れている。

「最早や嘗ての軍国主義者達が叫んだあの「平和のための軍備」乃至「平和のための戦争」という、あのまことしやかな伝説に決してごまかされはしないだろう」(p.8)

「今日の世界を大局的に見るならば、百万人に一人くらいのわずかな野心家が、戦争は不可避であると、やっきになって宣傳してまわっているにもかかわらず、事実人類が戦争を防ぎ得ること、そして現に防ぎつつあることを示しているではあるまいか。」(p.12)と述べている。

次に「子供観」について、長田は多くの箇所では子供を讃える言葉を書いている。被爆した学齢期以前の幼児から小学生・中学生・女学生までの子供達の心を「純真で、無邪気で、感受性の強い、軟らかな魂」(p.6)と呼び、「まだ特定のイデオロギーや宗教的世界観や政治思想などによって染められていない、無垢」(p.6)

という。長田自身が「日本のペスタロッチ」とも呼ばれる著名な教育学者であり、子供を純真、無邪気、無垢な存在として見る見方は自然であったともいえよう。この子供観と並行して、長田は両親のうち特に母親の愛を称賛する。多くの母親が倒壊した家屋の下敷きになり脱出できず、わが身と命を捨てて子供を生き延びさせようとしたことを知っているのである。

更に長田は「特に述べたい」(p.31) こととして、原爆という異常な悲劇の中で発揮された「人間愛の精神」, 「人間のその偉大さ」(p.31) を挙げる。

それは親子の間、兄弟姉妹間の肉親愛、教師と生徒との師弟愛、友情、知らない者との間の献身的な、ほとんど超人的な人間愛であり、広島市周辺にあって被災者を看護した農村の人々の温かい同胞愛のことである。長田はここに「人間はもともと孤独な利己的な存在ではなく、本来隣人愛にもえた偉大な存在である」(p.31) という厳然たる証拠が見えるという。

この人間観は長田の「教師観」ともつながっている。長田は原爆投下直後の教員の献身的な姿を何度も取り上げ、

「地獄のような瞬間にあっても、尚お且つ愛する生徒を救おうとして、遂に斃れた此等の教師達の人間愛・教育愛を吾々は見逃してはならない」(p.30)

のであり、これが教員の「人間愛・教育愛」(p.30) であるという。一方で生き残った広島の教員は亡くなった同僚・教え子たちの笑顔を中心に刻みながら軍国主義に反対する平和教育を地道に続けていると讃える。

長田は何のイデオロギーや思想にも染まっていない純真・無垢な少年・少女の魂が書いた原爆体験の手記を出版することによって、核兵器が世界を破滅に導きかねない核の時代に世界中の人々の心を動かし世界を

平和に導くのだと主張する。

『原爆の子』の手記を「人類史上における不朽の記念碑」(p.6) とし、被爆者である教員の人間愛・教育愛と純真・無垢な子供の魂の訴えを広島の平和教育の根柢にするのである。

こうして始まる長田の「平和教育」のもう一つの根柢は日本国憲法とユネスコの国際教育にある。長田は日本国憲法はアジアへの侵略戦争の反省に立った日本人が自ら作った憲法であり、戦争放棄は押し付けられたものではなく、戦前、日本国民が犯してきた罪を全世界の人々に懺悔して戦争放棄の憲法を決定したのだという。また、長田は有名なユネスコ憲章の「戦争は人間の心の中に始まるものであるから、人間の心の中に平和のとりでを築かなくてはならない」との言葉に共感し、平和を築く営みこそが教育であるという。

以上の「戦争」, 「平和」, 「憲法」と教育との関係は長田の平和教育思想であり広島の平和教育の基本的枠組みを形成する。

長田のアメリカによる原爆投下に対する考えは「序」第4章の「四」に見られる。長田の要点は10項目に整理できるが、本稿では割愛する。沖縄戦の意味やアメリカの対ソ政策、アメリカ人の原爆使用に対する考え方などが書かれている。

最後に『原爆の子』の児童生徒による手記の特徴について確認する。1951年1月から始まった長田の学校への作文依頼によって集まった手記は1000編を超えていた。手記は執筆者の年齢によって4部に分けられ、第1部は被爆当時満4歳から7歳までの児童42名の作文で、作文を書いた時点では小学校4年生から6年生の児童となっている。第2部は被爆当時国民学校1年生から3年生までの児童24名で、作文執筆の時点では中学校1年生から3年生になっている。

第3部は被爆当時小学校4年生から5年生の17名で執筆当時は高校1年生から3年生になっている。最後の第4部は被爆当時小学校6年生か中学校1年生であった20名である。作文執筆当時には短大生または大学生になっている。

作文の記述内容は年齢が上がるにしたがって詳しく長くなる。第1部の作文はほとんどがひらがなで書かれ分量も少ない。幼児期の記憶力は成人とは異なるにもかかわらず、悲惨な印象を書き綴っている。論理的な記述ではなく脳に刻み込まれた強烈な印象を表現しているように見える。

第2部以降は、年齢に応じて記述が次第に論理的になり被爆後の広島市内の状況が捉えやすくなる。手記を書いている時点における知力をもって記憶を再構成し、当時の思いや自分の主張を書いた文章が多くなっ

ている。また、分量も多い。

被爆から6年が経っているが、手記に記述されている期間はほとんどの手記が8月6日の被爆後の数日間である。翌年以降の事を書いている手記は全105編のうち18編のみである。長田の考えに沿うように原爆による悲惨と人間愛を象徴する数日間の記述が中心となっている。

2. 広教組・広島県原爆被爆教職員の会が関わる平和教育資料と長田の平和教育思想との関係

(1) 「広島県原爆被爆教職員の会」会長石田明の平和教育思想の特徴

1節で見た長田の考えを受けて積極的に平和教育を進めたのは広教組に所属する「広島県原爆被爆教職員の会」であった。被曝体験を持つ教員は1960年代に入って、広島の人々の原爆体験が風化しつつあることに危機感を抱き、1969年に「広島県原爆被爆教師の会」（当時）を結成した。更に広教組は1972年に原爆問題の風化を防ぎ、平和教育を推進する体系的な平和教育教材を提供する組織として、「広島平和教育研究所」を設立した。同所の開所式には「広島平和教育の父」(『95未来』p.124)として長田新の写真が掲げられた。

広島市内の公立中学校教員の石田明は「広島県原爆被爆教師の会」初代会長となり、広島平和教育研究所の創立・運営にも関わった広島の平和教育の中心的人物の一人である。また、石田は1973年に自らの原爆による白内障の認定を国に求める訴訟を起こし、平和運動にも加わる活動家でもある。

石田は『原爆の子』を「平和教育の原典」(『どう』p.241)と述べており、長田の平和教育思想は石田に継承され平和教育研究所に繋がっていると考えられる。

広教組が平和教育教材として各学校に提供し、基本的な資料として重要視されているのが『未来を語りつづけて—原爆体験と教育の原点』(1969年)と『続・未来を語りつづけて—ヒロシマ・平和教育の継承と連帯 原爆被爆五十年事業』(1995年)である。特に前者は教育学者の宗像誠也、家永三郎や日教組委員長などが推薦文を寄せ労働旬報社から出版され、全国に向けて広島の平和教育をアピールする記念碑的な資料集である。石田はいずれの『未来を語り続けて』にも論説を書いている。

また、石田は1971年に広教組・広島県原爆被爆教師の会（当時）が共編で明治図書から出版している『原爆をどう教えたか [教育問題新書 34]』にも終章に論説「おわりに「ひろしま」をいまこそ教えねばなら

ぬ—核時代の教育を問う—」を書いている。同書には主に広島県内の小学校・中学校の平和教育実践例が載せられている。

3つの資料に見られる石田の平和教育思想を長田の平和教育思想に見た6つの観点から細かく検討したいが、本稿では次のような言葉に石田の観点を見ることにする。

「戦争を科学的に追求し、人民の力で、戦争の根源や、戦争をしくむ階級を告発する力を身につけさせること」(『どう』p.242)

「傷つきやすい子どもたちのヒトミから光を奪い、柔らかな頭脳が、(中略)だが、自ら考えぬいていくこと、自分の主張をもち、“なぜ”と問いつめること、自分でも押さえきれないほどあるだけのエネルギーを出してのびていくこと、これが子どもの存在」(『69未来』p.14)

「人類存亡の危機「原爆犠牲の事実」を最初に見た、生き残ったヒバクシャ、被爆教師の生涯かけてのつとめであると思う。」(『95未来』p.2)

このような言葉には石田の戦争観、子供観、教師観が表れているとともに長田の平和教育思想の継承が見られる。

また、石田は日本国憲法を「人類の不断の努力によって確立された地球よりも重い人間の生命の尊厳と、人類普遍の人間としてより人間らしく生きる権利、基本的人権」(『69未来』p.15)

を謳ったものであるから、あらゆる場と機会で子供たちに学びとらせなければならないと主張し、長田の憲法観と似通った憲法観を持っていることが分かる。

(2) 「広島平和教育研究所」による平和教育の理論化

次には長田、石田の平和教育思想が1972年に設立された広島平和教育研究所にどう反映されているかを見なければならない。

広島平和教育研究所が関わった『平和教育研究年報』(1974)と『平和教育実践事典』(1981)の中で平和教育の日本独自の理論化がなされている。西欧では戦争(暴力)を「直接的暴力」と「構造的暴力」に分け、階級・民族・人種などによる差別や抑圧のような構造的暴力の解決に重点が置かれているのに対し、日本の平和教育は「直接的暴力(戦争)」に力点が置かれ、そこから平和を科学的に認識させるところに重点が置かれるとする。そして日本の直接的平和教育の目的と内容は次の3要素からなる。

①体験教材などを通して戦争(原爆)の持つ非人間性、残酷性を知らせ、戦争への怒りと憎しみの感情を育てるとともに、平和の尊さと、生命

の尊厳を理解させる。

- ②戦争の原因を追究し、戦争を引き起こす力と、その本質を科学的に認識させる。
- ③戦争を阻止し、平和を守り抜く力とその展望を明らかにする。』（『平和教育実践事典』, 1981）

3つの要素は1節で整理した長田の平和教育思想に重なるものであるが、解説文に①の要素については感情・感動を起こすためにはできるだけ現物に接し、追体験を原爆の原体験に近づける必要があるとしていることに注目する必要がある。（『95未来』p.128）

3. 広教組が関わり平和教育教材とした資料の使用法の特徴

この節では前節までに見た長田に発する平和教育思想が広教組が関わった平和教育教材にどのように反映しているかを確認したい。

(1) 広島市原爆体験記刊行会編『原爆体験記』の特徴

様々な人々が書いた原爆体験記は被爆直後の広島市内の実相を知るための主要な教材とされ、平和教育教材の中に色々な原爆体験記が使用されている。作家ではない無名の被爆者による原爆体験記として最も早期に作成、影響力のあったのは広島市編集の『原爆体験記』と長田新編集の『原爆の子』の2つであろう。そのうち『原爆の子』手記の特徴については1節で既に確認した。

広島市が企画した広島市原爆体験記刊行会編『原爆体験記』の手記にはどのような特徴が見られるだろうか。この体験記集は1947年に広島市長となった浜井信三が就任直後に市民に手記を募り、集まった手記の一部を被爆5周年の1950年に刊行しようと計画したもので、当初はGHQから差し止められ発行できなかった。被爆20周年の1965年に朝日新聞社版として刊行されたことを浜井は喜び、「この一編が、原子爆弾の様相を知るよすがとなり、世界平和確立の助けとなるように心から折ってやまない」（『原爆体験記』pp.3-4）と「序」に書いている。

被爆直後の広島市内は多くの手記が言うように「地獄」の様相であった。浜井はその様相はこれまで色々な記録や詩、絵画や映画で表されたが、いずれも直接原爆を体験した者の実感にはほど遠いと書いている。

浜井のもとに集まった手記はわずかに164編であったが、そのうちの29編が出版されている。執筆者は8歳の小学生から55歳の大学教員までが含まれる。手記募集が1947年であるから手記には長く続く原爆後遺症や生活困窮に関する記述は少なく、8月以降についての

記述があるのは6編に止まっている。

(2) 原爆体験記以外の教材とされた資料の特徴

広教組が関わって作成された平和教育教材集の中には被爆者による体験記の他にも教材として、『黒い雨』『この世界の片隅で』『原爆詩集』『ヒロシマ・ノート』『屍の街』『夏の花』などの文学作品が必ず挙げられている。既に述べたように広島市編『原爆体験記』や長田新編『原爆の子』は記述の対象期間が原爆投下後数日間という特徴があった。本節ではこの2つの原爆体験手記以外の他の教材資料の使い方によどのような特徴があるかを見る。

原爆投下は人類史上初めて数十万の一般市民に向けられた攻撃であり、想像を絶する異常な体験の中心は投下直後の短期間であるからほとんどの原爆体験手記が広島市『原爆体験記』や長田編『原爆の子』のパターンをなぞるようになるのは当然かもしれない。よく使用される教材『いしぶみ』も被爆した広島第二中学校1年生が全員被爆死しているから被爆者による手記ではないが、最後の生徒の死亡が8月11日であるから被爆からわずか6日間の記録である。

文学作品の『夏の花』『屍の街』『黒い雨』『原爆詩集』なども基本的には原爆投下直後の状況を描写している。それでも『黒い雨』は元の題名が「姫の結婚」であったように、原爆投下直後だけでなく数年後も続く被爆者差別の問題も描いている。

1970年代後半に出版された漫画『はだしのゲン』も視覚的説得力の強さから平和教育教材としてよく使われるようになった。この作品は長期連載で、被爆者ゲンの成長物語がもう一つのモチーフである。被爆後からつづく被爆者や原爆孤児の長く苦しい生活の実態が具体的に描かれている。

以上のような資料の内容を踏まえ、これまで繰り返し取り上げた『69未来』と『95未来』を検討する。但し、『69未来』は発行時期が早いため具体的に詳細な授業案は少ない。実際に近い授業案や実施した授業の報告は『どう』や『学ぶ』、『95未来』に多くある。そこでこれらの3つの資料に使用されている原爆体験記や小説など文学作品の扱い方を見る。

『どう』や『学ぶ』の2つの資料はいずれも1971年の発行で、前者が小学生・中学生対象とし、後者が高校生を対象としたものである。

『どう』では美術科、理科、英語科、国語科、社会科、特別活動等での実践報告がなされている。このうち美術科、理科、英語科、国語科は原爆投下直後の様相の再現であったり、物理的現象の理解を進める内容となっている。社会科は歴史的視点から原爆投下の理由

や経緯を学習する内容であるが、原爆投下の理由は長田が『原爆の子』の「序」文で挙げた理由を繰り返しているものがほとんどである。特別活動では追体験として原爆関連施設を回る学習旅行や原爆映画の鑑賞、演劇・音楽の鑑賞等が挙げられている。

英語科と国語科の教材が原爆体験記であり、両教科とも原爆投下直後の様相を描写した部分を使っている。

『学ぶ』でも社会科、理科、国語科における実践報告や授業案の提示が多いが、全ての科目で原爆に関連する事項を学習計画に含めるようにしていることが分かる。高等学校の特徴として演劇部などの文科系クラブ活動で創作劇を行う例が見られる。

その他に学校行事やホームルーム活動での取り組み事例も記載され、教育活動のすべての局面に平和教育を折り込もうとしている。

同書の実践事例の最初に世界史の授業が報告されている。報告のタイトルは「広島を原点とした世界史教育プラン」である。授業の中で大江の『ヒロシマ・ノート』の一部が使われている。被爆によって精神を病んだ老人の物語で、原爆以降の人の「生」の破壊が描かれている。被爆直後の話ではないが、授業者の意図は被爆者の現実の「生」のあり様を問うのではなく、原爆がいかに長時間にわたって被爆者を苦しめる「非情」なものかを知らせ、当時盛んであった日本人の「核アレルギー論」を否定するためであるとしている。

『95未来』には映画『はだしのゲン』鑑賞を教材とした報告が見られる。生徒の感想文には原爆投下直後の悲惨と反戦意識を強くしたことが書かれている。

これらの資料の読み込みから見えてくる特徴は広教組関係者が関わって作成された平和教育資料では教材とする資料の一部分しか使用していないこと、実践内容が「広島平和教育研究所」が示している平和教育の3要素と重なることである。使用している一部分は原爆投下から数日間の悲惨な状態の記述部分であり、被爆後、何年にもわたる被爆者の生活の困窮や被爆者への差別等の問題は取り上げていない。

4. 広島市退職校長会『戦中戦後における広島市の国民学校教育』に見られる教育の特徴

前節までに広島市の平和教育を主導した広教組の平和教育の展開過程を見た。この節では広教組主導の平和教育とは違った戦後教育の流れがあったことを広島市退職校長会が1999年に作成した『戦中戦後における広島市の国民学校教育』の中に確認する。同書には1945年の被爆直後の広島市内国民学校の具体的な状況が実

際の資料を伴って記されている。

本文は3つの章と補整編及び資料編からなっている。各章の内容は以下のとおりで各章の各節ごとに体験記が掲載されている。(第1章から第3章の内容は省略)

- ・第一章 戦時下の教育
- ・第二章 原爆被災と学校教育
- ・第三章 戦後教育への移行
- ・補整編 (第1章から第3章までの教育実践の背景や内容を補整する原稿を掲載している)
- ・資料編 (新教育計画、小学生心得、疎開日記、満蒙開拓青少年義勇軍、被爆の状況他9つの資料)

国民学校内での被爆死者の処理や原爆孤児への対応などの具体的な資料も多く含まれているので戦中戦後の教育の変遷を理解する助けとなる。

資料編の中に「己斐プラン」と緑井国民学校の「公民科教授要目」がある。終戦直後の国民学校における戦後教育改革への対応を知るためこの2事例を見る。

戦後の教育改革が始まると学校は直ちに公民科の授業計画・授業案を考えなければならなかった。GHQは軍国主義復活阻止のために教育制度改革に力を入れていた。1946年秋にGHQの教育担当官が来広し、焼け残った己斐国民学校にモデル授業を研究・発表せよとの指令が伝えられた。己斐小学校では教員が東京はじめ他の先進校を見学して「己斐プラン」と名付けた新教育プランを作成した。1947年からは校内で研究成果発表会が開かれ、1950年には雑誌『教育技術』(小学館)3月号で全国へ発信している。

『教育技術』における挨拶で、当時の校長水野は終戦後の子供達の生活の荒れを目の当たりにし、子供達を護らなければと思った。そして、1949年5月に国会で成立した平和都市建設法については、

「恒久平和を誠実に実現しようとする我等日本国民の理想の象徴として広島市を平和都市として建設する」ものであり、「世界の恒久平和を念願する人類至高の理想を照射して真に意義深いものがある。惨敗の苦痛の中に再生を期して四年。ここに理念のシンボルを建設するに当って、原子炸裂の初光を以って朱に染まり、新時代の到来を世界に報じた広島が地が「平和都市」として選抜されたことは、八千万同胞の意志であると思う時、吾々同人の教育愛は更に燃え上がり、理想と抱負に胸ははりさけん許りである」(『退校会』p.221)

と述べ、「教育愛」の熱情に溢れる言葉を残している。

「己斐プラン」の教育目標は「科学性・自主性・社会性」をもつ「近代的日本人」の育成である。そのため教育が「合理的科学的な教育」、「個性尊重の教育」、

「友愛協同の教育」であり、「友愛協同の教育」の中に「地域社会に即した平和教育」がある。

1949年の「己斐プラン」第三回研究発表会には県内外から1300名の参加者が集まり、一応の成果をまとめることができた。しかし、翌年6月の朝鮮戦争勃発と世相の一変、受験準備への対応によって「己斐プラン」の実践はとん挫することになったと記されている。

一方、終戦の翌年、1946年2月には、緑井国民学校も新教科「公民科」の授業案を作成している。緑井国民学校の場合はGHQからの指示等を受けて始まったのではなく、当時の校長をはじめとする教員が自主的に始めたものであった。

公民科であるため、廃止された従来の修身・歴史・地理の枠を超えた内容で、初等科5年生以上を対象とする授業案である。「教材」は6項目ある。

- 1 ポツダム宣言と敗戦の原因——（以下、略）
- 2 科学の進展——（以下、略）
- 3 産業の振興——（以下、略）
- 4 財政の確立——（以下、略）
- 5 国民道徳——戦争による国民道義の紊乱について反省し道義的新国家建設の精神的基礎を確立する。
- 6 新国家の建設——非科学的な神国観優越感が敗戦をもたらした事実を明らかにする（以下、略）（『退校会』pp.225-235）

終戦の翌年1946年1月1日に天皇によるいわゆる「人間宣言」が行われた。翌月の2月に発表された授業案という限界がうかがわれる。「5 国民道徳」の指導上の「注意」には、

「・天皇の御鴻徳は歴史を通じて不変であった事を強調する。（以下略）」（『退校会』p.30）

と書かれ、軍閥による天皇制の濫用を防ぐために総選挙が必要であることを理解させるとの文言がある。一方で原爆に触れた項目は全くない。授業者の意識が戦前から変化していないことと同時に原爆を取り上げることを選んでいることが分かる。

「己斐プラン」も緑井国民学校の公民科授業案も1946年という終戦から間もない時期に始まっている。特に「己斐プラン」はGHQの指令から出発していることもあり、校長が最初の被爆都市としての広島の意味を強調し、平和教育の語を口にしているも原爆被害の実態に関する文言はない。教育愛の熱情を持って実践された「己斐プラン」も朝鮮戦争の勃発とともに廃れた。政治状況の変化が「教育」の意味も変えたということである。

5. 各種アンケート調査結果に見られる傾向

原爆に対する人々の意識の差は本稿で取り上げた資料に掲載されている被爆者や児童生徒に対するアンケート調査の結果にも現れている。

被爆者を対象とした調査である朝日新聞社『原爆・500人の証言』の調査結果と児童生徒を対象とした調査である広教組関係の資料『69未来』『95未来』『学ぶ』に掲載されているアンケート調査の結果を見る。

（1）朝日新聞社『原爆・500人の証言』に見られるアンケート調査結果の意味

1967年に朝日新聞社は自社の記者が、広島・長崎両市で被爆し、その後全国に移住した被爆者500人に直接取材した結果を『原爆・500人の証言』に編集して出版している。回答者は広島原爆投下前日に生まれた女性から80代の被爆者までを含んでいる。質問項目は被爆の状況、現在の症状、属性、被爆者差別、被爆者団体や運動への関心、核保有国に訴えたいこと、国への要望など40項目にわたっている。

広島の被爆者318人のうち原爆を投下したアメリカについて「まだ憎い」と答えた者は73人であり、154人は「憎くはない」、88人は「何も感じない」としている。被爆22年後の時点で広島の被爆者の8割はアメリカを憎いと思っていない。記者が驚いているのは「憎くはない」と答えている被爆者の中に「仕方がない」という言葉が多かった事である。戦争だから日本にも責任があり、原爆の「おかげで」戦争が終わったと考えている者もいた。自分たちは戦争の犠牲者であるが「戦争だったのだから」という声が聞かれたという。

核戦争の可能性について問う質問に対して、広島・長崎両市の被爆者500人は起こる可能性が低いとはいえないと答えた者が45%で、「起こらない」「わからない」と答えた者は55%となっている。

平和運動団体への加入意識・関心についてのアンケート結果は関心の著しい低さを示している。広島では90%を超える被爆者は平和運動に参加しないと答えている。運動を否定的に捉える意見も多く、3つの団体に分かれていることが被爆者の真の願いを体現しているとは思えないとする意見もあった。「利用されている」と感じる被爆者も少なくないという。被爆後の20年間で被爆者の意識が一様ではないことを示している。

（2）広教組関わった児童生徒アンケート調査の結果の意味

平和教育に関連して広教組が中心になって実施した

児童生徒へのアンケートが数種ある。被爆者に対する質問と非被爆者である児童生徒に対する質問項目は当然異なる。同じ形式による調査ではないので、回答者や質問者の判断の影響の少ないと思われる戦争や原爆投下に関するアンケートの調査結果を見る。

一つは『69未来』に掲載されている小学生・中学生に対して1968年12月に実施された「原子爆弾（被害）に関する調査集計」とその継続調査として行われた『95未来』に掲載されている1987年の調査及び『69未来』に掲載されている1966年8月～10月にかけて高校生に対して行われた調査である。

『69未来』の調査は広島県内の小学校5年生から中学校1～3年生1956名へのアンケートで、『95未来』の調査は7330名に対して行われている。『69未来』の高校生対象の調査は広島と佐世保・福島・札幌の高校生400名へのアンケートである。

先に『69未来』の小学生・中学生へのアンケート結果を見る。このアンケートでは原爆投下の時間や場所等を聞く7つの質問項目があり、その内、7番目の質問項目が「原爆投下の目的は何か」となっている。この質問は中学生にのみ訊ねている。

学年によって若干の違いが見られるが、対ソ政策と答えた者が20%、早期終結のためが24%、実験のためが50%、日本への憎しみが10%という結果である。このアンケートを広島平和教育研究所が継続して行っており、『95未来』に最新データとして1987年に7339名の小学生・中学生を対象に行った結果が示されている。対ソ政策が9.7%、早期終結のためが32.3%、実験のためが33.4%、日本への憎しみが11.3%となっている。対象者数が1968年の調査に比べ3倍以上増加していることや1980年代末にはソビエト連邦の存在感が薄くなっていることの影響も考えられるが、早期終結のためと考える児童生徒が増加し、原爆投下を実験のためと考える児童生徒が減少している点が目につく。

『69未来』に載っている1966年実施の広島県内外の高校生400名に対するアンケートでは一番目の質問がアメリカの原爆投下についての質問である。このアンケートも学年や男女別、課程別の区別を設けていない。質問に対する回答の選択肢は6つあり前半の3つと後半の3つは趣旨が異なっている。前半3つは投下理由を聞くもので、後半3つは戦争の可能性やアメリカに対する意識を聞くものになっている。

アンケート調査の結果に広島と広島以外の地域との回答に大きな違いはない。前半の投下理由を問う調査では理由がどうあれ人道に許せないという回答が62.5%であり、戦争のため仕方がないという回答は28.6%いる。戦争早期終結のためという回答も11.9%

いる結果となっている。後半の結果は省略する。

もう一つの高校生対象の調査は、『学ぶ』に掲載されている調査結果である。1971年1月に広島県内の公・私立高校生にアンケート調査を行い1975名から回答を得ている。詳細は省くが上記の調査結果と同様な傾向が見られた。特に「第二次大戦でアメリカが原爆を投下したことをどう思うか」という質問に対し、絶対許せないとする生徒は全体で52.8%、被爆家庭生徒であるか否かに拘わらず50%を超えている。次に多い回答が戦争の早期終結のためとする28.2%である。属性により多少、幅があるが、おおむね20%を超える回答となっている。3番目が戦争だから仕方がなかったとする回答で、11.7%となっている。1割を超える高校生が仕方がなかったと答えている。絶対に許せないと思う生徒が半数しかいない点と合わせて考えると原爆投下を容認するような意識があるように見える。

このアンケートでは日本の核武装の可能性を訊ねる質問もあり、反対が46.8%、持つかもしれないとする者が44.9%である。核武装に賛成する者が5.1%いるので、やむを得ないとする者と賛成する者を加えると50%の高校生が日本の核武装を容認していると読むことができる。

高校生へのアンケート調査は1970年から1971年にかけて実施されている。被爆から25年以上経った時点での調査であるから、高校生は小学校・中学校で平和教育を受けている可能性はあるが、広教組及び広島県原爆被爆教職員の会による「組織的な平和教育起こし」（『95未来』p.96）以前であり、広島の平和教育の影響は薄いと見るべきなのか、原爆体験の風化と見るべきなのか、高校生も原爆への思いは一様とは言えないだろう。

6. 広島での平和教育の特徴とその課題 一人間の持つパトスの視点から

前節までの検討により長田新が『原爆の子』で示した平和教育の理念はその後の広島での平和教育に強く影響していることが確認できた。この節では広島での平和教育の特徴とされる「一方向性の強さ」を、被爆者間、教員間、児童生徒間に見られた原爆に対する意識の差との関係から考察する。人間のバトスを視野に入れて考える。

広島での戦後の教育を考える場合に、長田の平和教育思想を引き継いだ石田明（広島県原爆被爆教師の会初代会長）の属する広教組の存在を抜くことはできない。広教組は県内での高い組織率を背景に政治的な力を保ち、広島市教育委員会や広島県教育委員会等の行政組

織との交渉の場に力を発揮してきた。このことは戦後の広島の教育を考える前提となる。

(1) 長田の子供観、人間観、教師観の問題性

本稿は教育学者としての長田の教育思想を問うことが主旨ではないので、広島の平和教育に多大な影響を与えた長田新編『原爆の子』に見られる長田の子供観、人間観、教師観を考察の対象とする。1節で見たように長田は子供を純粋・純真・無垢な精神を持つ存在とし、人間は困った人を見れば直ぐに救いの手を差し伸べようとする愛を持った存在で、教師は我が身を顧みずに子供のために尽くす愛の人であるという性善説に立っている。

教育学者長田にとって、この人間観は当然であるが、原爆体験記に出てくる現実の人々や文学作品に描かれる人々は愛の人だけではなかった。倒壊した家屋の下敷きになった家族や友人・知人を見捨てて逃げ出した人も多し、被災者を拒否して雨戸を立てる家もあった。家族を失った戦災孤児をたらいまわしにする親戚や学校で戦災児を「乞食」と呼んで差別することも珍しくはなかった。大人として長田がこのような現実を知らないわけではない。現実を承知した上で、長田は平和を構築するための人間像として愛の人を提示したのである。純真・無垢な子供や何の罪もない愛の人々を死に追いやった原爆の非人間性を明瞭にするにはこの人間像は意義がある。また、教員にとって純真・無垢な子供像は受け入れやすいものであり、それを前提に教育は進められていると言うこともできるだろう。しかし、子供の「純真・無垢」性は教えられる内容によって危険な状態を招くことを日本の教員は経験済みのはずである。また、戦争の悲惨を含めて人間とは何かを問う教育にとって、人間を性善説に閉じ込めることは教育の視野を狭めることにならないだろうか。

更に「純真・無垢」な子供像は「教える者—教えられる者」という「一方向性」の教育関係を前提にしないだろうか。長田は「純真・無垢」な子供の魂が世界平和を訴える根拠になると考えたが、時間を経るに従って、教員は「純真・無垢」な子供の魂を風化したものと見なして矯正または教化の対象と捉えていったのではないか。継続的に行われるアンケート結果に見られるような子供のバトスを「蒙」と見なし理性によって啓き、教員が一方向に導く対象とする意識が強められていないだろうか。

(2) 戦後教育の分裂構造の反映

4節で見たように戦後の早い時期から原爆を教育の中でいかに扱うかをめぐり教員の意識は一樣ではなかった。被爆教職員という立場は同じであっても、自

らの原爆体験を細々と語り続け、やがて「組織的平和教育起こし」に加わっていく者と、原爆被害についてあまり触れないまま民主的教育の実践を試みる者との間に意識の違いがあった。前者は平和教育—教職員組合—教員というラインに繋がり、後者はGHQ—文部省—教育委員会—校長—教員というラインを形成した。

ここでも結局、戦後教育の典型となった文部省と教員組合との対立構造が現れたのである。平和教育をめぐるこの対立は長田が願ったイデオロギーを超えた広島発の平和教育を政治的な場に持ち込むことになった。

教員組合の高い組織率を背景に広島の平和教育は日本を代表する平和教育になったが、終戦直後に作られた「己斐プラン」に見られる平和への熱情は文部省ラインへとつながり、教員組合ラインの広島の平和教育とは反目あるいは平行のままであった。

また、政治的な場に持ち込まれた広島の平和教育は教員組合の動きと連動して同和教育との類似性を持つようになった。県・市教育委員会と交渉しながら学校教育の中に平和教育を教育計画に制度的に位置づけ、全ての教科や特別活動の中に平和教育の理念を盛り込もうと努力するのである。平和教育「運動」の推進にとっては前進であるが、制度化によって戦後早期から見られた平和教育をめぐる立場や意識の差異は乗り越えられたのだろうか。平和教育を教える側の熱情による平和「運動」教育になっていないだろうか。

おわりに

「ヒロシマ」の心は核兵器反対・平和の希求であり、その心の源は原爆の悲惨である。この論理は長田が『原爆の子』で示し、石田が継承して広教組を通じて広島の平和教育を主導してきたものである。そのため平和教育教材として頻繁に使用される『黒い雨』『ヒロシマ・ノート』『この世界の片隅で』などの文学作品や、原爆体験記には被爆後の長い生活苦を綴ったものが少なからずあるにもかかわらず、教材としては被爆後の数日間の記述部分のみを利用し他の部分は取り上げない状況が見られた。原爆の「非人間性、残虐性を知らせる」ために原爆の追体験を重視することが広島の平和教育の第一要素であるから、子供は毎年繰り返す原爆の悲惨を「知らされる」ことになるのである。

教科書からの原爆記述の削減や「核アレルギー論」などの保守化を克服するために「組織的平和教育起こし」が必要であったと広教組は言う。しかし、少なくとも組合員が原爆体験を思い出したくない、語りたくないと感じていた。そのことが学校内に意識の違いをもたらしていた。平和教育授業の中で見た映像を、

生徒はあまりの残虐性に目を背けたと感想文に書いている。教育の起点は子供の感性の尊重であろうが、社会「科学的」なロゴスによって子供の蒙を啓くため、アンケート結果や戦後教育の分裂、被爆者の生活苦に現れた原爆による受苦としてのパトスを視野に入れようとしないのである。

このことを『黒い雨』の解説文を書いた河上徹太郎は原爆が「余りにショッキングであり、直ちにそれが道徳的批判に訴え、そして有無をいわずそれに対する政治的討議の場へ人々を招くことになる」(『黒い雨』p330) ため多くの原爆小説が肝心の人間性が希薄になっていると批判している。この言葉はこれまで多くの研究者が、平和教育を「一方的善悪観」「子供の思考停止」へと導いた経路を突いている。

本稿では広島での平和教育がたどった経路の起点が長田の平和教育思想にあることを明らかにすることはできた。更に平和教育に対する教員の意識の差に注目することによって、広島での平和教育に向けられた批判を克服するためには、これまで平和教育が軽視あるいは一方的に啓蒙すべき対象として見なしてきた被爆者や児童生徒の現実の「生」のパトスを視野に入れることが必要ではないかという見通しを持つことができた。

一方で今回検討した資料が2000年前後までのものが中心であり、数量も限定的であるため、論証が不十分な面があった。今後は十分な資料数を準備し、2000年以後の広島での平和教育の発展について更なる研究を行いたい。

【引用・参考文献】

- ・朝日新聞社編『原爆・500人の証言』, 朝日新聞社, 1967
- ・『あすのために』編集委員会編『あすのために—これが原子爆弾と戦争の真実—』, 広島県高等学校原爆被爆教職員会, 2007
- ・井伏鱒二『黒い雨』, 新潮社, 1970
- ・大江健三郎『ヒロシマ・ノート』, 岩波書店, 1965
- ・長田新編『原爆の子—広島市の少年少女のうたえ—』, 岩波書店, 1951
- ・大田洋子『屍の街』, 日本ブックエース, 2010 (初出は1948)
- ・小学校平和教育教材編集委員会・広島県原爆被爆教師の会編『ひろしま—これはわたしたちのさげびです—』, 広島教育会館出版部, 1970
- ・竹内久顕編著『平和教育を問い直す—一次世代への批判的継承』, 法律文化社, 2011
- ・中沢啓治『中公愛蔵版 はだしのゲン』, 中央公論新社, 1996 (初出は1975)
- ・日本平和学会編『平和研究第52号 平和教育といのち』, 早稲田大学出版部, 2019
- ・広島教組 原爆・平和教育推進・編集委 原爆被爆教職員会『“ひろしま”から学ぶ—高校用原爆・平和教育教材資料 (試案) —』, 広島県高等学校教職員組合, 1971
- ・広島県教職員組合海田地区支部編『教師が語りつぐ戦争体験』, 戦争体験記編集委員会, 1983
- ・広島県教職員組合・広島県原爆被爆教師の会『未来を語り続けて—原爆体験と教育の原点—』, 労働旬報社, 1969
- ・広島県教職員組合・広島県原爆被爆教職員会編『統一・未来を語り続けて—ヒロシマ・平和教育の継承と連帯 原爆被爆五十年事業』, 広島平和教育出版部, 1995
- ・広島県教職員組合・広島県原爆被爆教師の会共編『原爆をどう教えたか 教育問題新書34』, 明治図書出版社, 1971
- ・広島市原爆体験記刊行会編『原爆体験記』, 朝日新聞社, 1965
- ・広島市退職校長会「戦中戦後における広島市の国民学校教育」編集委員会編『戦中戦後における広島市の国民学校教育』, 広島市退職校長会, 1999
- ・広島テレビ放送編『いしぶみ—広島二中生全滅の記録—』, ポプラ社, 1983
- ・村上登司文『戦後日本の平和教育の社会学的研究』, 学術出版会, 2009
- ・山川剛『私の平和教育覚書』, 長崎文献社, 2014
- ・山代巴編『この世界の片隅で』, 岩波書店, 1965
(主任指導教員 丸山恭司)